

平成24年度第1回野菜需給・価格情報委員会消費分科会の概要

1 日時

平成24年7月6日（金） 16:00～18:00

2 場所

独立行政法人農畜産業振興機構 南館1階会議室

3 概要

(1) 特にお聞きしたい論点（資料1）の説明

資料1により説明。

(2) 最近の野菜の需給・価格動向について（資料2）の説明

- ・ キャベツは、愛知、千葉、神奈川、茨城、群馬が主産地。価格は、5月下旬まで概ね平年より高めに推移。5月中旬には一時的に需要に対応できず高値となったが、6月から平年を下回り推移。東京都中央卸売市場への入荷量は、4月中下旬は前年を下回り、5月上旬は一時的に入荷が増え、その後も前年をやや上回っている。
- ・ だいこんは、千葉、茨城、青森が主産地。価格は、4月中旬までは生育の遅れにより入荷が減少し高値で推移。5月以降は5月中旬に入荷が減り高値になったが、青森産の出荷開始により6月以降は平年並みで推移。東京都中央卸売市場への入荷量は、4月上旬は前年より大きく入荷減、5月中旬は前年より少なく、6月は前年並み。
- ・ たまねぎは、4月が北海道、佐賀、5月以降は佐賀、兵庫が主産地。価格は、昨年の北海道が不作で、今年の佐賀、兵庫が低温、降雨による不作となったことから、期間を通じて平均価格を大幅に上回り推移。東京都中央卸売市場の入荷量は、一昨年の北海道が不作だったため4月上中旬は前年を上回っているが、平年より少なく、5月以降は5月上旬を除き、前年を下回っている。
- ・ にんじんは、徳島、千葉、埼玉が主産地。価格は、4月は平年を上回ったが、5月は平年を下回り、6月は平年をやや上回り推移。東京都中央卸売市場の入荷量は、4月は前年よりも入荷減、5月は前年より増加、6月は前年を下回り、平年をやや下回る。
- ・ はくさいは、茨城、長野、群馬が主産地。価格は、4月中旬までは低温による生育遅れのため高値だったが、5月中旬に平年を下回り、6月以降は平年をかなり下回り推移。東京都中央卸売市場の入荷量は、4月上旬、下

旬は前年を下回り、5月上旬、下旬に前年を上回り、6月中旬以降は前年を下回り推移。

- ・ レタスは、香川、茨城、兵庫、長野、群馬が主産地。価格は、4月中旬までは低温による生育遅れのため高値、5月は中旬を除いてやや高め、6月以降も中下旬は平年を上回って推移。東京都中央卸売市場の入荷量は、4月は前年並みだが、5月以降は前年を上回って推移。

(3) 野菜の消費関連資料（資料3）の説明

① 平成23年6月から平成24年5月までの消費動向は以下のとおり。

- ・ 1人当たり購入数量は、生鮮全体では、低温や曇天の影響により総体的に高値になったことから、平成23年12月以降、2月を除いて前年を下回って推移。購入数量は、高値になると減少する傾向があり、2月は、前年が低温・少雨の影響で高値だったことから、購入数量が前年を上回った。だいこんとはくさいは、夏場に消費が減少する傾向にある。
- ・ 1人当たり購入金額は、生鮮全体では、前年が平年でない猛暑の影響により高値であったこともあり、8～12月は前年を下回って推移。今年に入ってから、前年をかなり上回っている。だいこんとはくさいは、夏場に減少する傾向にある。
- ・ 過去10年間における1人当たり年間購入数量等の推移は、生鮮野菜全体では、年によって変動が見られるが、消費者物価指数が高くなると、野菜の購入数量が少なくなる傾向がみられるが、全体の購入数量はほぼ横ばいで推移。
キャベツは、平成18年以降、増加傾向となっているが、だいこんは、減少傾向となっている。
品目毎に年齢階級別に見ると、6品目すべてで60歳以上の購入数量が最も多い。だいこんは、特に20～40代の購入数量が著しく少なく、キャベツ、はくさいも、若年層の購入数量が少ない傾向にある。にんじんは、世代間の差が少ない。
- ・ 小売価格は、6～12月にかけては、一部の品目を除き、猛暑の影響により高値だった前年を下回った。キャベツ、だいこん、はくさい及びレタスは、1月以降、低温、少雨等の影響で出荷量が少なかったため、前年を上回って推移。たまねぎは、前年が不作で高値であったことから、前年を下回って推移した。にんじんは、6月以降、主産地の出荷が順調であったことから、前年を下回って推移した。
- ・ 野菜の年齢階級別摂取量は、全世代において目標としている1日350グラムには届いておらず、依然として、20代、30代、40代が少ない水

準となっており、特に40代の摂取量の減少が著しい。摂取量が一番少ない20代の野菜摂取量は年々減少傾向となっている。

- ・ 家計での外食支出金額は、平成24年5月で対前年同月比102%と回復基調となっている。
- ・ 外食店の売上高及び利用客数は、10月以降、利用客数は前年をわずかに上回った。売上高は、前年を上回って推移したが、5月は前年を下回った。

② 今後の天候

- ・ 降水量は、7月は全国的に少なく、8月、9月は西日本で多くなる。
- ・ エルニーニョ現象、ラニーニャ現象も発生していない。夏と秋にエルニーニョ現象が発生する可能性もあるが、平常の状態が続く可能性の方が高い。

(4) 平成24年産夏秋野菜の需要・消費動向の見通しに関する各委員からの意見

① 野菜全体の目下の消費動向

ア 景気、天候等の要因による消費動向

- ・ 4～5月は、単価が高い中で、消費が低迷した前年に比べて回復傾向にあることから、金額ベースで前年を上回った。
- ・ 一方、景気が低迷している中で、まだまだ消費者の低価格指向があり、量目調整を含め、低価格での販売を継続している。
- ・ 直売所においては、割安に購入できるとの印象があるため、野菜の価格が高くなると業績が良くなる傾向にあり、対前年を超えて好調である。

イ 震災や原発事故の影響による消費動向

- ・ 関西のベンダーでは、関東産を敬遠する動きが以前に比べて薄れている。また、海外の日本の農産物に対するネガティブなイメージはなくなりつつある。
- ・ 特定の地域の野菜は、依然として一部の消費者が敬遠する傾向にあるものの、他の産地のものを手当てしつつ、併売している。
- ・ 学校給食では、安全性は理解しているが、心情的に特定の地域のものが敬遠される傾向が継続している。

ウ 野菜全体の販売状況

- ・ 低価格指向への対応として、1/2、1/4カット等、量目を調節して販売している。
- ・ 消費者の原発事故に対する意識が少しずつ変わってきているので、あえて店頭で「安全」とアピールせず、普通に売っていくことも心がけている。

② 夏秋野菜主要6品目の今後（7～10月）の見通し

ア 全体（主要6品目）の傾向

- ・ たまねぎを除く5品目については、生育が順調であり、平年並みの動きになると思われる。ただし、北海道において、干ばつや高温となっている産地もあり、今後の動向が心配である。一方、たまねぎについては、国産及び輸入品ともに高値が続いており、北海道産が出るまでは高値が続くと思われる。
- ・ 生食用と加工・業務用は産地が異なるため、加工・業務用産地の動向を把握することも重要である。

イ 夏秋キャベツ

- ・ 量販店では、1/2カットでの販売が過半を占めているが、直売所では、カットをしないで売るのが主体となっている。
- ・ 加工、業務用において、千切りキャベツの需要が増えている。

ウ 夏だいこん

- ・ 夏場は、需要期でないため、1/2、1/3等のカットでもなかなか売れない。
- ・ 業務用でも、大根のツマ程度の需要にとどまっている。

エ たまねぎ

- ・ 価格が高いため、バラ売りが増えている。
- ・ 中国でも主要産地の作付面積が減少しており、米国産も含め輸入品の価格が総体的に高くなると思われる。
- ・ 北海道以外の産地が限られているため、北海道産の端境期を補完する産地づくりが必要である。

オ 秋にんじん

- ・ 基本的な野菜なので、新たな販売戦略をたてるのがかなり困難であるが、生食、ジュース、煮物等の需要があるので、それぞれの用途にあった品種を提案したい。

カ 夏はくさい

- ・ 冬の野菜というイメージが強く、夏のはくさいはなかなか売れない。1/4等にカットして販売しても売れず、量販店では売場面積を減らす方向にある。

キ 夏秋レタス

- ・ 台風4号の影響が心配されたが、影響は軽微であり、出荷量は回復している。
- ・ 業務用では、結球レタスではなく、サニーレタス等のリーフレタスの需要が拡大している。

③ その他の販売活動の動き

【オリンピックの影響】

- ・ 今回のオリンピックは、時差の関係から日本では深夜に生中継されるので、朝サラダ等の朝食メニューを提案していきたい。また、テレビを見ながら食べられる商品を提案したい。

【カット野菜】

- ・ 量販店では、カット野菜の販売が好調であり、売場面積や品揃えを拡大しているところがある。
- ・ 外食では、店内での野菜の加工処理能力が低下しているところもあり、業務用のカット野菜に対する需要が増加している。
- ・ 野菜料理用の市販の合わせ調味料と一緒に、材料野菜をカットしたパックを販売しており、好評を得ている。

【食育】

- ・ 野菜を食べることが体にいいことは、誰もが頭では理解しているが、行動が伴っていないことから、市場に調理室を作って若い人に食べてもらう取り組みを行っている。

【今後注目される品目】

- ・ 機能性が注目されているトマトは、そもそも販売の基幹品目なので、多くの品種をそろえて、バラエティに富んだ売場を提供している。
- ・ 外食では、彩り豊かなパプリカが安定して使われ、西日本で使われていた青ねぎが東日本でも普及してきている。また、現在、アボカドが注目され、サラダ用等をはじめアボカド料理に付随して使用する野菜が伸びるのでないか。

【その他】

- ・ 旬の野菜は、おいしくて栄養価も高いため、おいしさや機能性をアピールした売り方を提案したい。
- ・ 直売に対する意識が高くなり、直売所に出荷している生産者は増加している。
- ・ 基本食材について、需要の過半を占めている加工・業務用対応の産地作りを今後とも進めていくことが重要である。

(5) 野菜需給・価格情報委員会への報告

(4) の意見を小林座長が取りまとめ、各委員の了承を得た上で、7月12日開催の平成24年度第1回野菜需給・価格情報委員会に報告することとなった。